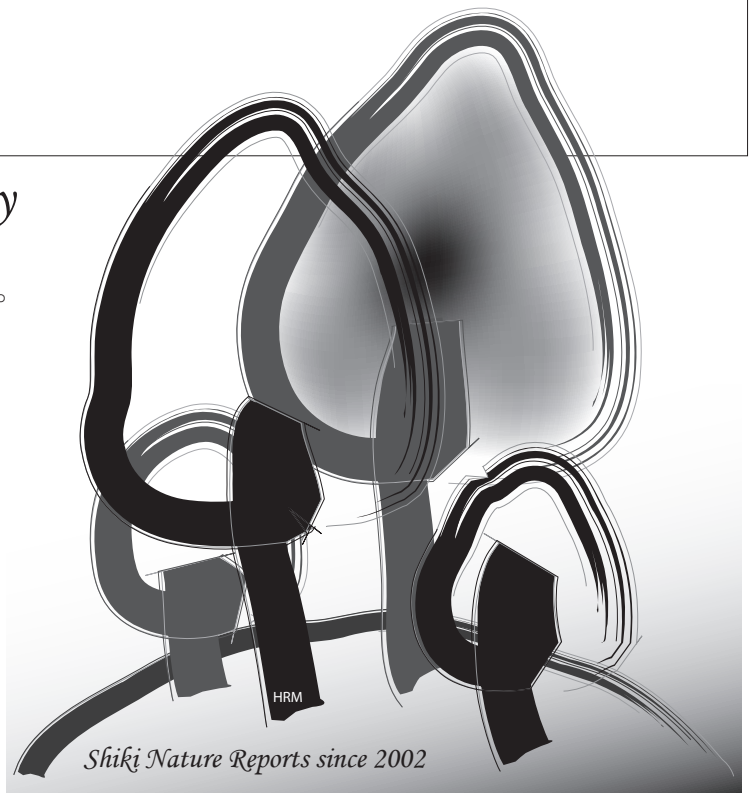
四季 ―志木自然報告―
Shiki Seasonal Nature Reports 2019

巻頭言…新年度のご挨拶

Cover Story



新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新2・3年生の皆さんも、この一年が実り多きものであることを祈ります。

いま、手にとって頂いているこの小誌は、2002年から続く、本校の自然を中心に取り上げているものです。そして、さまざまなものの見方を伝えるためのものでもあります。入試の面接で本校への志望理由を聞かれ、「豊かな自然に恵まれた環境で落ち着いて勉強したいからですっ！」と答えた者は少なくないはず。

では「豊か」とは何か…。答えの一つは、目の前に漠然と広がっている風景でしかない自然環境について、構成する要素が何かを知っていて（何の花が咲き、何の樹が実をつけているのか。今囀っている鳥は何か…等）、それらがお互いにどのように結びついているかを知っていることです。

そして、これは何に対しても言えることです。例えば、「豊かな」人間関係をもつ人というのは、自分を取り巻く一人一人のひとを理解し、どのようにそれぞれが結びついているかを知った上でさまざまな配慮できる人、ということを指します。

「四季」は、その入り口として自然を通した「豊か」な見方を提案するものです。そして、豊かにしてくれるものは、ほかの何ものでもなく、意識してそれらを見ようとする主体性ある「自分＝貴君（あなた）」です。自ら、本校を取り巻く環境に興味を持ってみてください。　本校を卒業する時、「豊かな」眼が養われていることを心より祈ります。

(Miyahashi)

チョウショウインハタザクラ（長勝院旗桜）

Botany

この桜については、井澤先生が2010年と2013年のそれぞれ「四季」春号に紹介記事を書かれている。その二つの記事とは違う切り口で紹介しようと思う。

本校南端の畑の東側に表題の桜が今年も花を咲かせた。この親木は、志木市柏町にあったとされる長勝院跡の桜の古木で志木市の文化財に指定されている。2003年に志木市よりその苗木を2本譲り受け、牧童横と畑地横に植樹したが、後者のみ生き残り、今も花を咲かせる。「ハタザクラ（旗桜）」の名称の由来は、雄蕊の1、2本が旗弁と呼ばれる花びらに変化することで、花の中央に旗が立っているように見えることによる。

生物選択者には周知のことだが、花を構成するパーツである「萼」、「花びら（花弁）」、「雄蕊」、「雌蕊」は発生学的にはもともと葉っぱである。これが、たった3種のホメオティック遺伝子の組み合わせで何になるかが決定されるため、雄蕊⇄花びらなどの突然変異が比較的簡単に起こる。例えば、一般的に「八重咲」と呼ばれる花びらの枚数が多くなる品種は雄蕊が花びらに変異している（八重になる花は、薔薇、桜、椿などのように雄蕊の本数がもともと多い）。

さて、チョウショウインハタザクラだが、すでに書いたように雄蕊の一部が花びらに変わる。ただ、変わり方にはいろいろあるようで、今年気がついた個体は雄蕊の先端だけ花弁となっている。そのため、本当に一辺3～5ｍｍ程度の小旗が桜の花の中央ではためいているように見え、ちょっとかわいい。

チョウショウインハタザクラ【バラ科】

(Miyahashi)

z/c 353-0004 埼玉県志木市本町4-14-1[tel: 048-471-1361]
慶應義塾志木高等学校

2019年　春 号（No.068）
2019年　4月12日発行

志木高構内の気温変化（2018年1月～2018年12月）

Meteorology

1999年度より校内で10分ごとの気象観測を行っています(自動気象観測)。図は2018年の気温変化を、縦軸を気温、横軸を1～12月でプロットしたものです。11月あたりは直線になっていますが、実は観測機器をコントロールしているパソコンの不具合によりデータを紛失してしまいました。（10月26日18：00～12月1日20：20のデータがない。）

観測項目は、気温のほか気圧、風向・風速、降水量(雪は融けた水量)、湿度、太陽放射量、紫外線インデックス等です。観測は数秒ごとに更新されます。その数秒ごとのデータを、専用のソフトを使ってパソコンの画面に表示するようにしてあります。このリアルタイムのデータは理科棟2階の地学準備室前の廊下のガラス窓内のパソコンで見ることができます。ぜひ一度見てください。

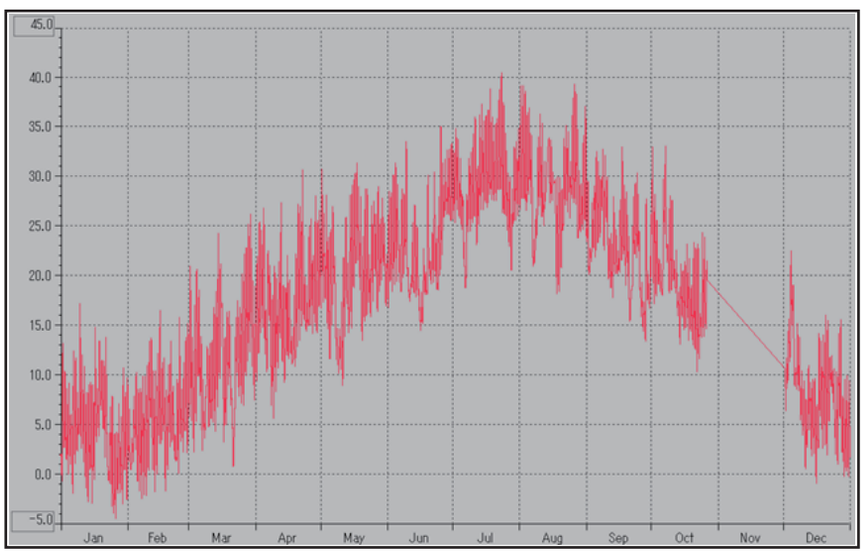


図　志木高構内の気温・降水量変化（2018年1月～2018年12月）
10月26日18：00～12月１日20：20のデータがない。

(Higuchi)

志木の森ツアー　～ジビエ料理～

Culture

今年も先月17日～20日に、志木の森ツアーが行われた。このツアーでも近年、恒例となっているのはジビエ料理である。自分達で大きな寸胴鍋で作るカレーには鹿肉を使い、バーベキューでは、ジビエ料理のレストランのシェフに出張で来てもらい味付けしてもらった猪肉または鹿肉を食べるのだ。どちらも味は言うまでもなく最高である。

もともと「ジビエ」というのはフランス語で狩猟動物の肉の意味で、そんな動物が自分の領地で捕れるのだという象徴の意味もあり、古くはフランス貴族の高級食材として扱われたようである。このジビエ料理、いま全国的にブームとなっているのだが、それは農水省、環境省が強烈にキャンペーンしていることも要因となっている。以前は保護していた野生動物だが、平成以降、増えすぎて農作物被害が年間200億円超となってしまい、とにかく減らすという施策を政府は打ち出した。実際、志木の森にも鹿がいて、木が齧られる被害もあって、林業家にとってもそれは大打撃であるという。

そんなわけで現在では、特に鹿と猪はそれぞれ年間60万頭超ずつが捕獲されている。それまで保護されていた動物が一転して害獣となり、何をもって増えすぎとか、最適の数とか人間が決めることではないだろうなんてことにはまだ疑問があるのだが。とにかく政府がキャンペーンをうって、狩猟ブームにもなって、狩りガールなる女子も増えて、たくさんの動物が狩られているので、この命を無駄にしないようにということで、ありがたくジビエ料理としていただくことには大賛成である。抗生剤入りの飼料で育てられたどこぞの肉とは違い、脂身も少なく健康的でもあるらしい。

ぜひ自分も食べてみたいと思った方は、志木の森ツアー参加してみてほしい。新入生諸君も、志木高でしかできない事をぜひ体験することを強くお奨めする。

＊このときは野生動物のエサとなる木の実が前年の冬に豊作だったため、臭みの少ない良質な肉になったという

ジビエ（鹿肉）カレー

ジビエ（猪肉）ＢＢＱ

(Izawa)

年中行事の世界　No.05 退位礼正殿の儀 ―皇位継承儀礼編01―　*Annual Events*

今年は皇位継承が行われる珍しい年ですので、小欄では主な儀式に注目します。今回は「退位礼正殿の儀」について。実は「退位」という表現は日本史上極めて異例です。というのも、従来の皇位継承は(A)「譲位(じょうい)―受禅(じゅぜん)」型（＝前天皇在世中に新天皇に皇位を譲る）か(B)「崩御(ほうぎょ)―践祚(せんそ)」型（＝前天皇死去後に新天皇が即位する。厳密には昭和～平成は「崩御―即位」型といえる）かで行われ、8～18世紀頃はむしろ（A）が主流でした（明治以降、皇室典範で原則（B）に）。その意味では、今回は一見（A）に回帰したようにみえます。

ところが、象徴天皇制のもと、天皇ご自身の意思による「譲位」が日本国憲法（第4条1項「天皇は、この憲法の定める国事に関する行為のみを行ひ、国政に関する権能を有しない。」）に抵触することが懸念された結果、今回の皇位継承はあくまで「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」の「直接の効果として行われる」（2019.6.9参議院での菅官房長官答弁）との政府見解が出され、譲位ではなく退位だとされました。つまり、実態はともかく、従来型の（A）でも（B）でもない、いわば（C）「退位―即位」型が新たに創出されたといえます。そのためか、退位礼正殿の儀ほかの「退位の礼関係諸儀式」は、「平成大礼（＝即位儀礼。筆者補）の儀式の枠組みを基本に、旧皇室祭祀令を参酌して行われてきた祭典の前例や、通常行われている儀式を参考とし」て儀式・次第が立案され（宮内庁HP）、近世以前の譲位儀礼は実際にはほとんど取り入れられていません。「創られた伝統」という議論がありますが（E.Hobsbawm）、今回、私たちは「伝統が創られる」場面を目のあたりにするのです。

(Ikeda)

ヨーロッパと狼　*Zoology*

今年の冬、2か月ほどドイツのSiegenという大学街に滞在した。住んでいた場所から大学まで異様に交通の便が悪く、毎日雪山を一つ越えて通っていた（大変だった）。片道2時間、往復4時間ほどの距離を、今日こそ遭難するのではないかという恐怖と戦いながら歩いていたある日、事件が起きた。途中で休憩をしていたら、巨大な足跡を見つけたのだ。手のひらくらいある足跡には、ご丁寧に爪の形までくっきりついている。「最近ドイツに狼が戻ってきた」というニュースを思い出しながら、猛ダッシュで下山をしたのは言うまでもない。

さて、ドイツの狼は19世紀に姿を消したといわれていたのだが、ここ最近、狼たちが再び姿を現している。東欧から渡ってきた狼たちはドイツの東側に生息しており、その数は150～200頭と言われている（幸いSiegenは西側です、ほっ）。今でこそ貴重な存在とされている狼だが、もともとドイツをはじめヨーロッパでは、狼は長いこと忌み嫌われる存在だった。

狼に悪いイメージが付与されたのは、13～15世紀頃だと言われている。人間が土地を開墾するにともなって狼たちが生息していた森が減少し、狼と人間の生活圏がぶつかるようになった。狼が人間の家畜を襲うことも増え、嫌われる動物となる。さらに群れで行動し統率の取れた行動をとる狼の姿は、人々に恐怖を与え、恐れられるようになった。13世紀以降、ヨーロッパでは戦争や飢饉、流行病なども流行ったことで、もともと恐怖の対象だった狼に悪魔的なイメージも付与された。

たとえば、言語学者・民話収集家であったグリム兄弟は、ドイツ各地で語られていた説話をまとめて『グリム童話』を編纂したのだが、その中には『赤ずきんちゃん』や『狼と七匹の子ヤギ』など、狼が悪役として登場する童話が複数存在する。たいていの場合、狼は人間や他の動物を食べようと悪知恵を働かせたり、相手を襲い、最後には猟師に殺され、一件落着となる（童話の狼や猟師が何を象徴するかについては面白い研究が多くなされているので、興味のある人は調べてみてください）。

このように狼は憎悪の対象となっていたため、19世紀になるまでたくさんの狼が殺されていき、1904年に最後の一頭が銃殺された。しかし最近になって、再び狼がドイツをはじめヨーロッパで見られるようになり、保護活動が積極的に行われている。何世紀にもわたって人間に嫌われていた狼だが、さらに歴史をさかのぼると狼は神聖な獣として扱われていた（狼によって育てられた、ローマの建国神話に登場する双子のロームルスとレムスなど）。

このように、狼は人間の一方的な都合や見方で、評価が大きく変わった生き物の代表である。温暖化の影響などで地球の環境も大きく変わっているいま、狼の存在が我々に問いかけることは多いのではないだろうか。

【Ｓｉｅｇｅｎにて発見した謎の足跡】
地元住民からは、大型犬ではないかとのこと

(kurita)

志木の自然[如月(2月)弥生(3月)卯月(4月)]

Plants

今年はソメイヨシノが、卒業式頃に咲き始め、入学式で九分咲きになる、という「とてもよくできた」咲き方をした。ソメイヨシノなどの桜には「600度の法則」というものがあり、その年の2月1日以降の最高気温の累積温度が600度を超えた日に桜が開花するというものである。卒業式後に低温が続いたのが幸いした。

話は変わるが、HR棟と管理棟の間の林床に今年もカタクリが花を咲かせた。例年よりも若干開花が遅い。昔はその根が「片栗粉」の原料として重宝された。現在売られている片栗粉はジャガイモのデンプンである。

[2019年2月～2019年4月までの開花情報]

Grass

4. Feb.2019 チチコグサ, ウシハコベ

20. Feb.2019 タネツケバナ

25. Feb.2019 ショカッサイ

8. Mar.2019 ハナニラ, カラスノエンドウ, セイヨウタンポポ, カントウタンポポ, フキ

16. Mar.2019 カヤツリグサ, トキワハゼ, オランダガラシ

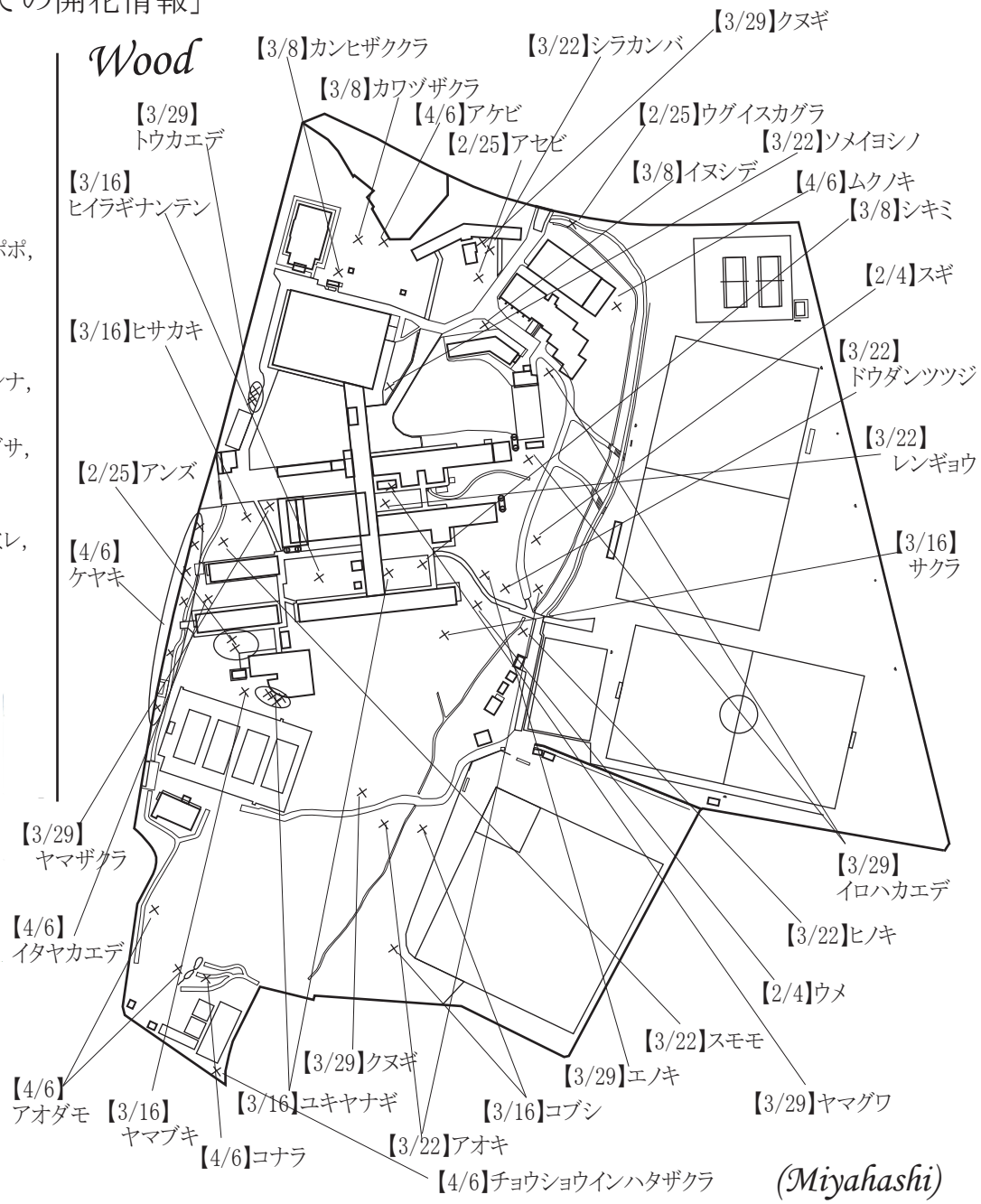
22.Mar.2019 カタバミ, タチツボスミレ, カラシナ, カタクリ, ムラサキケマン

29.Mar.2019 キランソウ, イヌムギ, キュウリグサ, シロツメクサ, ハナイバナ, ミチタネツケバナ

6.Apr.2019 フデリンドウ, マルバスミレ, スミレ, オッタチカタバミ, ヘビイチゴ, カキドオシ, ナガミヒナゲシ

【カタクリ】
ユリ科カタクリ属

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。
名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤　智浩 *(Izawa)*
	天文・気象	樋口　　聡 *(Higuchi)*
	風習・行事	池田　卓也 *(Ikeda)*
	動物	栗田　くり菜 *(Kurita)*
	植物・地質　他[&発行責任]	宮橋　裕司 *(Miyahashi)*
	編集・植物画	荒巻　知子 *(Aramaki)*